いわゆる準備教育について

山下　俊郎

一

幼稚園でも保育所でも、保育施設である限り、保育を終了した幼児たちは、必然的に小学校へ入学する。だから、この意味においては、保育施設は、発達段階としての就学前幼児期の教育をおこない、小学校への入学の準備的教育をする場であるといえる。しかし、それはどこまでも発達段階としての幼児期の教育を完全におこなうということであって、直接の小学校への準備をするという意味ではない。ところが、今日、現実の保育施設をみると、まったく直接の準備教育の機関になってしまっているところが少なくないというのが実状である。わたくしたちは、どこまでも幼児教育の独自性を認め、この時期でなければ与えられないものを幼児たちの身につけてやる教育が幼児教育であることを強く主張したい。したがって、いわゆる直接的な準備教育に対しては、どこまでも反対する。いわゆる準備教育は幼児教育の破壊者である。

いわゆる準備教育には、二通りのものが見受けられる。その第一は特定大学の付属小学校あるいは私立の有名小学校に入学するための関門として幼児に課せられるテストの予備練習をつめ込む準備教育であり、その第二は一般の小学校に入学するのではあるが、その学校生活のスタートを滑らかにするために文字や数の学習を一生けんめいにさせるという準備教育である。この二つとも幼児教育を破壊するものである。

二

まず第一の種類の準備教育について考えてみよう。

わが子をいわゆる有名校に入れて、中学校、高等学校、そして大学へとしっかりした優秀児の集まっている学校へと進ませて、さらに社会に出るときよりよいそして間違いのない就職につけるようにしてやる、また女児の場合でもなるべくいい学校へ入れて将来の結婚へと進んで行く上に最良の条件を整えておくようにする、ということは、親の立場としてはどの親もまず望むことである。したがって小学校に入学する場合にそのような将来の進路が保証されている小学校へ入れようと願うのもまた当然であろう。そして、その関門をうまくくぐらせようとするとき、入学のテストの準備教育ということが問題として浮かびあがってくるわけである。

○○幼稚園からは××大の付属小学校へ何パーセント、私立の△△小学校へ何パーセントは、毎年かならず入学するということになると、今度はその幼稚園へ入園志願者が殺到する。そしてこうなると、その○○幼稚園では夏休み前から一生けんめいにテストの予備練習をすることに夢中になる。××を受ける子どもたちは、一般の保育の終った後に、居残りをしてテストのおけいこである。あるいは園によっては、一般の保育の中で、それに類したことをやることもあるらしい。

一体、テストのおけいこをすることが幼児の上にプラスになるものをもたらすかというと、そういうことは絶対にない。もたらすものはマイナスだけである。

もともとテストというものは、ひとりひとりの幼児の知能の発達の程度を測定するために作られたものさしなのである。ものさしではかった結果をよくしようと思って、そのものさしの計られ方をおけいこするというのは間違いである。せいを高く計られようと思ってせいのびをするおけいこをしても、その子の身長はけっしてのびていないのである。また、テストのおけいこをして少しでもよく見せようとするのは、いわゆる一時の付け焼刃である。極端な例をとるならば、体重をはかられるときに、少しでも目方を重く出そうとして、重い石をのませるのに似ている。なるほどその時のんだ石の目方だけその子は重くなってはいるだろう。しかし、それはけっしてその子の体重がふえたことを意味していないのである。

テストのおけいこによって、せいのびや石をのむことと同じような結果が出ても、それはどこまでも一時の付け焼刃であって、後になればそれははげてしまうのである。はげてしまってから、それはどうも無理な所に入り込んだといって後悔しても追いつかないのである。無理な所へ入り込んでしま

ったら、けっきよく落伍者になってしまうのである。

大事なことは、テストのおけいこよりも、幼児の生活全体にわたって、じゅうぶんに知能をのばすような保育をすることである。知能がのびるような生活の指導がおこなわれていれば、せいのびしなくてもせいがのびているのと同じであり、のんだ石でなくてほんとに充実した身体によって重い体重が出てくるのと同じである。生活によって、じゅうぶんに身についた実力は、どんなテストにかけても必らずはっきり出てくるはずである。

テストのおけいこは、保育の邪道である。そんなことをしている間に、少しでも身につくような保育をすることが大切である。保育者は、石ころをのませることが子どもの体重をほんとにふやすことにならないのだということを親にわからせる努力をしなければならない。そのことは、同時に、幼児保育の本質を親にわからせるということである。保育者は幼児保育の本質をはっきりつかめないで、誤った考え方をしている親たちを、その本来の正しい理解へと導いていかなければならない。

三

保育施設から小学校へ入学する子どもたちの全体から見たら、いま右に述べたテストのおけいこをするという子どもたちは、数的にはたいした割合にはあたらないかもしれない。（実害からいうと深いものがあることはいうまでもないが。）しかし、さきに第二の種類の準備教育として挙げた面については、その及ぶ範囲はかなりひろいものがある。

今日の幼児たちが、就学前にすでにある程度の文字を知っており、また数のこともある程度できることは、誰でも知っている通りである。それは、現代の幼児たちが、現代の文化の中に成育している限り、きわめて当然のことである。幼児たちの生活環境の中にある文字や数が、幼児たちの心にふれるときに、これを受け入れる成熟が幼児の側に用意されている場合には必然的に文字や数が幼児の身についたものになるのである。

しかし、今日の幼児教育の段階では、まだ文字や数は系統的学習の対象ではない。それは小学校に入学してから学習すべきものなのである。したがって、幼児保育施設においては、文字や数は生活の中に現われてくる場合においてのみふれるべきであって、これを系統的に教えるべきではない。

ところが、世の親たちは、わが子が小学校に入学した場合

に、少しでも他の子どもにひけをとらないために、文字や数をじゅうぶんに身につけさせておきたいと考えている。あるいは、もっと極端にいうならば、他の子どもたちを出し抜いておいても自分の子どもに数や文字のことを覚えさせておきたいのである。そして、このことを幼稚園や保育所に要求する親が少なくないのが実状である。そこで、わたくしたちは、世の親たちが「あそこの幼稚園(という場合保育所も含めて)は、ちっとも文字や数のことを教えてくれない、こっちの幼稚園では教えてくれるのに。」といい、教えてくれる幼稚園の方が評判がよくなり、私立の施設の場合には経営の上からこの親たちの声に引きずられるという場合もかなりあるように見受けるのである。

幼児保育の本質は、文字や数の学習にはない、幼児の生活にこの時期でなければできないような充実をもたらすような生活指導をするのが幼児保育の本質である。幼児保育者はこのことを親たちによくわからせなければならない、わからせる努力をしなければならない。そして文字や数の準備教育ということよりも、充実した幼児としての生活をさせることをつとめることが何よりも大切である。

(すでに述べたように今日の幼児たちがある程度すでに文字や数を身につけていることは現実である。この現実からして、今日の子どもたちの成熟の程度からいえば、いま右に問題として取りあげた文字や数の系統的学習が、現在の小学校一年よりも前になされてよくはないか、そしてそのためには就学年令を一年さげてはどうか、というような考え方も出てくるわけである。このことは慎重に検討さるべき問題ではある。しかし、現在の段階では、いま右に述べてきたような考え方に立つことが、穏当であると、わたくしは考える。)

四

小学校への準備教育、とくにいま右に述べてきたような二通りの準備教育は、正しい幼児保育のあるべき姿を破壊するものとして、わたくしたちの身のまわりに見られるのが現実である。この現実に対して、わたくしたち保育者は、幼児の幸せとそのよりよい成長のために、真剣に考え、取り組んで、これを正しい軌道にのせるように努力しなければならない。そしてこの努力は、世の中の親たちに正しい理解を育てる方向へと向けられることによってよいみのりをもたらすものなのである。